

<感想>中国の北京の清華大学で開催された第7回 IAHR Symposium on River, Coastal and Estuarine Morphodynamis (RCEM2011)に参加し、日頃進めている水制周辺の局所洗掘および粒度分布変化に関する研究課題「Influence of Overtopping Ratio on Scouring and Sediment Sorting around Spur Dyke」について発表した。そして、北京から成都に移動し、四川大学で開催された The 2nd International Symposium on Sediment Disasters & River Environment in Mountainous Area (JSPS Asia-Africa Science Platform Program)に参加し、次は水制周辺の河床および粒度変化シミュレーションに関する研究課題「Numerical simulation of local scour and grain-size variation around spur dike using non-equilibrium sediment transport mode」について発表を行った。国外の研究者と議論し、自分の研究に関する感想や意見を得ることができた。また、著名な先生方の基調講演、そしてたくさんの国外研究者の発表を聞き自身の知見を広めることができた。

今回の派遣の中、国際会議に参加している研究者や先生方および学生と英語で会話する機会に恵まれた。派遣期間が短いことから大きな英語能力の向上は叶わなかったが、リスニング能力や短い英会話等の英語のコミュニケーション能力について少しは向上したように思われる。自分の研究分野に関する議論の場合は聞きなれない言葉は少なく、たとえ聞き取れない単語があっても前後の会話の内容から推測ができた。ただし、コーヒブレイクで交わされる会話では、研究課題に関する話題ではないため聞きなれない言葉が多く、会話の内容が理解できず返答に窮する場面が幾度もあり、さらなる英語能力の習得が必要であると痛感した。今回の派遣によって、自分の研究分野に関する英語だけでなく日常的なされる英会話などの幅広い分野の英語に接する機会を作る必要があること、そして、ネイティブのスピードの英語を聞き取るリスニング能力、また自分の話す英語のスピードも速くすることで会話の不快感を少しでも軽減する必要性があると感じ、自身の英語能力で不足している部分が浮き彫りになった。今後は、自分の研究分野の英語の文献だけでなく、幅広い分野の英語の文献に目を通し、さらに英語で話すことのトレーニングを行い、さらなる英語能力の向上に努めたいと思う。

今回の国際会議やシンポジウムの参加とプレゼンテーションを通じて、自分が行ってきた研究に興味を持ってくれる研究者が国外にも多く存在することが分かり、自分の研究内容を国内論文への投稿だけでなく、国外の論文へ投稿する必要があることを実感した。そして、国際会議で堂々と発表できるような英語の能力と、英語の Writing 能力の向上が必須であると痛感し、今後のさらなる英語のスキルアップに努めていかなければならないと考えている。

最後に、このような貴重な支援を頂いた京土会に心から深く感謝申し上げます。この機会ですんだことを今後の活動に活かしていきたいと思えます。